

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370559

研究課題名(和文) 英語における形容詞、名詞から構成される名詞句の修飾関係と、その意味拡張について

研究課題名(英文) The modification relations of an adjective-noun combination in English and its semantic extension

研究代表者

金澤 俊吾 (Kanazawa, Shungo)

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：70341724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：形容詞、名詞から構成される英語の名詞句には、多様な修飾関係が見られる。例えば、動作の様態を表す形容詞が、普通名詞と修飾関係を結ぶことができる。本研究は、この多様な修飾関係について、意味的連続性から、統一的に説明することを目的とする。当該名詞から構成される、様々な構文の意味的特徴を考察する。本研究により、各事例内の意味拡張は、詳述性によって動機づけられていること、事例の意味拡張が進むにつれて、名詞句は、主動詞によって表される事象、動作の様態を表す傾向が強いことを示す。当該名詞句は、いずれの事例においても、英語の形容詞の限定用法の規則に従う中で、多様な修飾関係を構築していることを示す。

研究成果の概要(英文)： In English, the noun phrase, consisting of [A-N], can have various modification relations. For example, an adjective expressing the manner of an action can modify a common noun, a noun describing an entity. The purpose of this study is to clarify the mechanism of the modification relations within the noun phrase in terms of its semantic continuity. We will explore the semantic characteristics of various constructions where the noun phrase occurs. We will show that the semantic extension of the noun phrase is motivated by specificity, which is one of the ways of human construals, and that as the semantic extension of the noun phrase proceeds, the noun phrase as a whole tends to have a strong tendency toward expressing the manner of an action described by a main verb. Finally, this study concludes that these various modification relations in all instances should meet the grammatical rule of an attributive use of adjectives in English.

研究分野：英語学

キーワード：形容詞 限定用法 名詞句 同族目的語構文 様態 詳述性

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の理論的および記述的背景

英語の名詞句[A-N]にみられる意味的特徴に関して、生成語彙論の枠組みの中で、Pustejovsky (1995)によって、名詞の語彙的意味構造と形容詞との修飾関係が検証されている。2000年以降、Boas や Kennedy, Paradisらにより、認知意味論や構文文法の理論的枠組みに基づいて、形容詞が、英語の諸構文、諸現象に生起する際に見られる意味的特徴が考察されている。さらに、Deignan (2005)により、形容詞が関わる、字義通りの表現と、比喩表現に関してコーパスを用いて頻度効果を検証する研究が行われている。

英語において、当該名詞句が関わる個々の事例に関して、意味的特徴を詳述する試みがなされてきた。例えば、記述的一般化に関しては、Huddleston and Pullum (2002)によって、名詞句[A-N]を構成する形容詞、名詞それぞれの語彙的意味の特徴が記述されている。また、理論的一般化に関しては、語彙意味論、認知意味論の理論的枠組みに基づき、名詞句[A-N]のスキーマの定式化や意味ネットワークが提案され、当該名詞句を体系的に捉える試みがなされてきた。

(2) 先行研究における問題点

当該名詞句の意味的特徴に関して、記述的にも理論的にも十分な一般化が図られているとは言い難く、解決されるべき次の問題点が残されている。

記述的一般化に関して

名詞句[A-N]を構成する、当該形容詞と、当該名詞との間に見られる、意味的融合や修飾関係が十分に検証されていない。Huddleston and Pullum (2002)は、名詞句[A-N]の多様な修飾関係を指摘しているが、当該名詞句を体系的に捉えようとする分析までには至っていない。

理論的一般化に関して

一連の意味理論に基づく修飾関係の定式化が行われてきたが、それを動機づける経験的事実の観察や、新たな言語事実の発掘が十分に行われていない。その結果、先行研究における分析は、実際の言語使用が十分に反映された一般化とは言い難く、スキーマの定式化に関しても、人間の事態認知の在り方が十分に反映されているとは言えない現状にある。

2. 研究の目的

英語における限定用法に分類される形容詞は、意味的には多様な修飾関係を構築する。一方で、限定用法の形容詞は、同一の統語配列[A-N]から構成されているので、各事例内、形容詞と名詞との間に見られる修飾関係には、一定の規則性が見られる。また、事例間

には意味的連続性が見られる。このことから、当該名詞句に見られる体系的な修飾関係が存在することが想定される。

これを基本として、本研究では、各事例において、[A-N]から構成される、名詞句の多様な修飾関係を考察する。その上で、各事例の意味拡張が体系的に連続的に進んでいることを明らかにする。最終的には、名詞句[A-N]に見られる一連の修飾関係は、統一的に説明されることを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) コーパスを活用することにより、名詞句[A-N]の各事例の経験的事実の収集と観察を行い、各事例内の修飾関係を考察し、頻度効果を検証する。本研究では、次に挙げる3つの名詞句の事例の意味的特徴を明らかにする。

形容詞がメトミニー的に名詞を修飾する事例 (e.g. a fast car)

名詞句内で主要部の反転がみられる事例 (e.g. John drank a quick drink/He gulped a quick drink of water.)

形容詞が後続する名詞以外の要素と修飾関係を結ぶ事例(e.g. The plowman homeward plods his weary way.)

(2) 名詞句[A-N]の各事例間の意味拡張が進む過程を検証し、当該名詞句に統一的に見られる修飾のメカニズムを明らかにする。

名詞句[A-N]の各事例には、多様な修飾関係が見られる。その一方で、同一の統語配列から構成されており、各事例に見られる修飾関係において、当該名詞句を構成する要素間には、規則的な意味的特徴が見られることを示す。

これらの現象を考察する上で、特に次の4点に注目する。

各事例内に見られる、形容詞と名詞との修飾関係を明らかにする。

- ・形容詞と名詞の間には、どのような修飾関係が構築されているのか。
- ・当該名詞句が、各構文に生起する際、主動詞との関係で、どのような意味機能を担っているのか。
- ・各事例内でどのような意味拡張が見られるか。

各事例の頻度効果を検証する。

- ・各事例に分類される名詞句のタイプ数とトークン数を調査する。
- ・この調査により、各事例に分類される名詞句の生産性の高さと、名詞句の定着度合いを解明する。

名詞句[A-N]の意味拡張の過程を明らかにする。

- ・各事例における意味的特徴に基づき、これら3つの事例間の修飾関係と連続性が、体系的にどのように関係づけられているのか。
- ・当該名詞句内の修飾関係において、形容詞と修飾関係を構築する、Nの位置に生起する名詞は、意味機能をどのように変容させていくのか。

本研究で扱う3つの事例は、英語の文法規則によって統一的に説明できることを示す。

- ・いずれの事例においても、当該名詞句内のNの位置に生起する名詞の語彙情報が、共起する動詞や、当該名詞句の意味的特徴を決定する上で、重要な役割を担っていることを示す。
- ・本研究で扱う3つの事例は、英語の文法規則にある、「限定用法の形容詞は、統語的にも意味的にも後続する名詞を修飾する」に従っており、体系的に、統一的に説明できることを示す。

4. 研究成果

1年目である平成25年度は、名詞句[A-N]から構成される名詞句の意味的特徴に関して、3つの事例に関する経験的事実の収集と観察を行った。その上で、各事例において、修飾関係が成立するために課せられる意味的制約について考察した。の具体的事例として、形容詞 quick, quiet, thoughtful, meditative, careful と、飲み物を表す名詞 beer, whiskey との間にメトニミー的に成立する修飾関係に関して、事象名詞 drink との修飾関係と比較することにより考察した。その結果、それぞれの名詞句の容認度の違いは、事象の詳述性の違いに起因することを明らかにした。

の具体的事例として、軽動詞 have を伴う構文との比較により、同族目的語構文に見られる修飾関係の多様性について考察した。動詞句 drink-a/an-Adj-drink を基本形として考え、動詞の位置に drink もしくは、「飲む」動作の様態が指定される動詞 (gulp, sip, slurp, swallow, swig など) と、目的語名詞の位置に名詞 drink もしくは、drink と同族の名詞 (swallow, sip, swig など) との間に様々な組み合わせが見られることに注目した。意味拡張が進むにつれて、詳述性に違いが見られ、その違いが、動詞と、目的語名詞の組み合わせの違いに反映されることを明らかにした。また、同族目的語構文は、組み合わせの違いにより、「詳述化された同族目的語構文」と呼ばれる構文が存在し、3つの下位パターンに分類されることを提案した。

「詳述化された同族目的語構文」のうち、And she swigged a hurried gulp of Scotch.のように、動詞、目的語名詞ともに、drink と同族ではあるが、同型ではない語彙項目が生起する組み合わせのパターンが、最も詳述性が高い

ことを示した。さらに、の具体的事例として、Way 構文、転移修飾表現に見られる修飾関係を考察した。

2年目である平成26年度は、の具体的な事例として、名詞句 a cup/glass of NP の意味的特徴を考察した。とりわけ、形容詞が、cup, glass などの入れ物を表す名詞を修飾する場合と、coffee, beer などの飲み物を表す名詞を修飾する場合、それぞれに見られる意味的特徴を考察した。その結果、形容詞が、(i)入れ物を表す名詞を修飾するパターンと、(ii)飲み物を表す名詞を修飾するパターン、(iii)入れ物と飲み物を表す名詞どちらも修飾するパターンの3つに大別されることを明らかにした。

その上で、これら3つの修飾パターンにおいて、形容詞が、名詞によって表される実体の性質を表す事例から、実体と密接に関わる動作や事象を修飾する事例に至るまで、意味的連続性が見られることを明らかにした。その際、修飾対象とされる名詞の特質構造内の意味役割が、当該名詞句と共起する動詞の決定に対して、重要な役割を果たしていることを明らかにした。

さらに、当該表現の分布を通時的に検証した結果、年代毎に形容詞の修飾対象に変容が見られることが判明した。1820年代から1900年代にかけて、形容詞が、入れ物を表す名詞を修飾するパターンが多く見られる。しかし、1950年代以降、形容詞は、入れ物を表す名詞を修飾する位置に生起していながら、飲み物の状態を表すパターンが急増している。

3年目である平成27年度は、の具体的事例として、a/an-Adj-sip から構成される名詞句が、(i)軽動詞構文と、(ii)様態副詞構文、(iii)同族目的語構文にそれぞれ生起する場合に見られる、当該名詞句の修飾関係と、各構文での当該名詞句の意味機能について考察した。

その結果、場面を捉える際の詳述性の違いが、それぞれの構文の使い分けと、各構文内の当該名詞句と動詞の意味的分業の違い、各構文の頻度の違いに、それぞれ反映されていることを明らかにした。

軽動詞構文は、上述の3つの構文の中で詳述性が最も低く、様々な場面を表すのに適している。それに伴い、名詞句内の修飾関係も多様であり、頻度数も最も高い。形容詞は、後続する a sip と修飾関係を結ぶことにより、「飲む」事象や動作の様態、動作主の心理状態、飲み物の状態や量を表すことができる。しかし、当該名詞句と共起できる動詞は、軽動詞 take に限定される。

それに対して、同族目的語構文は、詳述性が最も高く、「飲む」場面を最も細かい粒度で表す。そのため、当該名詞句に生起する形容詞は、飲む動作の様態と、飲み物の量を表すのに限定され、頻度数も最も低い。しかし、動詞は、drink, sip, swallow など、名詞句 a sip と意味的に矛盾しないものであれば共起で

きる。

様態副詞構文は、詳述性、頻度数ともに先述の2構文の中間に位置づけられる。形容詞は、動作の様態や飲み物の量を表すことで、主動詞によって表される「飲み切る」動作の過程を詳述する。また、当該構文に生起する動詞として、drink や down, finish などが見られる。

最終年度である平成 28 年度は、これまで研究発表してきた と、それぞれの具体的事例に関して、詳述性を用いて説明を試み、論文にまとめた。

本研究で検証した各事例内に見られる意味拡張は、いずれも、知覚者が、場面をどの程度の粒度で捉えるかの違いによって、動機づけられていることが明らかとなった。

また、捉えた場面を言語化する際、当該名詞句と、共起する動詞との間には、意味的分業が見られ、その分業の違いによって、各事例の意味拡張が進んでいることが明らかとなった。

事例内で意味拡張が進む際、名詞句内の形容詞の分布と、当該名詞句と共起する動詞の分布との間には、相関性が見られる。それは、当該名詞句内に見られる、形容詞と名詞との間の修飾関係において、形容詞が様々な対象と修飾関係を構築するようになるにつれて、共起できる動詞の分布は狭くなっていく。対照的に、形容詞の修飾対象が狭くなると、当該名詞句と共起できる動詞の分布に広がりが見られる傾向が強くなる。

また、事例間の意味拡張に関して、事例から事例 に至るまで意味拡張が進むにつれ、当該名詞句は、主動詞によって表される動作や事象の様態を表す度合いが強まる傾向にあることが明らかとなった。それに伴い、名詞句として成立するためには、当該名詞句と共起する語彙項目に対して、厳しい制限が課せられる。

の事例では、名詞句単体では成立せず、共起する動詞が義務的に必要とされる。 の具体的事例である同族目的語構文の場合、形容詞と名詞から構成される名詞句は、動詞と同族でなければならず、形容詞が義務的に生起しなければならない。 の具体的事例である Way 構文においても、名詞句 one's way を修飾する形容詞は、随意的に生起できるが、one's が義務的に生起しなければならない。また、共起する動詞が、make, move いずれかの意味を内包していなければならない。転移修飾表現についても、共起する動詞は、名詞の語彙的意味に指定される、特質構造内の主題役割ないしは動作主役割を具現化していなければならない。

以上、本研究の成果から、研究対象とした3つの事例において、いずれの名詞句においても、英語の文法規則にある、「英語の限定用法の形容詞は、後続する名詞を修飾する」に従いながら、様々な修飾関係を構築しているという帰結が得られる。その際、名詞句内

の形容詞は、名詞の特質構造内のどの意味役割と修飾関係を構築するかによって、共起できる動詞が決定される。この点において、名詞句内の修飾関係が、各構文を形成する際、中心的かつ重要な役割を果たしていることは明らかである。

本研究で考察してきた、名詞句[A-N]に見られる意味的特徴には、各言語理論の知見が応用されている。修飾関係については語彙意味論と認知意味論、頻度効果の検証についてはコーパス言語学、各事例間の意味的連続性については認知意味論の知見がそれぞれ応用されている。また、本研究における、各事例に見られる修飾関係の検証は、人間の実際の言語使用を反映した経験的事実の観察に支えられている。このことは、人間の事態認知が反映されているとされる、名詞句[A-N]スキーマの精緻化にも貢献できることにつながる。

結びに、今後の課題について言及する。事例間の意味的連続性において、当該名詞句は同一の形式[A-N]を取り、「事象、動作の様態を表す」ということから、体系的に捉えられる。しかし、その体系性を動機づける一般原理に関して、さらに精査する必要がある。また、名詞句[A-N]によって構成される様々なスキーマと、頻度効果との関係性についても、さらに分析を進める必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

金澤俊吾、「転移修飾表現の意味解釈について - 修飾のメカニズムと表現の多様性 - 」、『日本英文学会第 85 回大会 Proceedings』、日本英文学会、査読無、2013 年、pp.217-218 .

金澤俊吾、「英語における軽動詞構文、同族目的語構文にみられる修飾関係について - have alan Adj drink, drink alan Adj drink を中心に - 」、『英語語法文法研究第 20 号』、英語語法文法学会、査読有、2013 年、pp.118-134 .

Kanazawa, Shungo, "Telicity, Change, and State: A Cross-Categorial View of Event Structure By Violeta Demonte and Louise McNally, Oxford University Press, 2012, vii+368pp.," *English Linguistics* 32.2, The English Linguistic Society of Japan, 査読有、2015 年、pp.371-384.

〔学会発表〕(計4件)

金澤俊吾、「形容詞の限定用法にみられる修飾関係の多様性について」、英語コーパス学会第 39 回大会シンポジウム「コーパスが語ること、語らないこと」、司会・講師、2013 年 10 月 5 日、東北大学 .

金澤俊吾、「名詞句にみられる修飾関係とその規則性について」、第 10 回英語語法文法セミナー『使える英文法：語彙・構文研究を現場にいかす』、講師、2014 年 8 月 4 日、関西学院大学 .

金澤俊吾、「英語の名詞句における修飾関

係の多様性とその変遷について」, 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催第1回ワークショップ「コーパスからわかる言語変化と言語理論」, 2014年9月8日、東北大学。

金澤俊吾、「現代英語における形容詞の事象修飾とその意味的特徴について」, 日本英文学会第67回中部支部大会シンポジウム「英語形容詞の形態・統語・意味」, 講師 2015年10月17日、名古屋工業大学。

〔図書〕(計4件)

金澤俊吾、「Have a 構文にみられる意味的性質について - Have a walk を中心に - 」, 菊地朗・小川芳樹・西田光一(編)『言語におけるミスマッチ』, 東北大学大学院情報科学研究科, 2013年, pp.53-67(総ページ数247)。

金澤俊吾、「いわゆる転移修飾表現再考」, 深谷輝彦・滝沢直宏(編)『英語コーパス研究シリーズ4 コーパスと英文法・語法』, ひつじ書房、東京、2014年, pp.199-223(総ページ数247)。

金澤俊吾、「形容詞の限定用法に見られる多様な修飾関係と修飾のメカニズムについて」, 菊地朗・秋孝道・鈴木亨・富澤直人・山岸達弥・北田伸一(編)『言語学を知る26考』, 研究社、東京、2016年, pp.45-56(総ページ数303)。

金澤俊吾、「名詞句内の事象修飾に見られる意味的特徴について」, 小川芳樹・長野明子・菊地朗(編)『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』, 開拓社、東京、2016年, pp.79-94(総ページ数453)。

〔招待講演〕(計1件)

金澤俊吾、「英語の名詞句内にみられる形容詞の修飾関係について」, 招待講演、新潟大学人文社会・教育科学系基幹研究プロジェクト言語学講演会、2014年10月24日、新潟大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金澤俊吾 (KANAZAWA SHUNGO)

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：70341724